

## 死生学の実存的・文学的（詩的・美学的）な側面について

島 蘭 進

日本では死生学の形成に先立って死生観への強い関心があった。死生観という言葉は、1904年に加藤咄堂『死生観』によって広まったものだが、当時、「死生問題」という語はすでに用いられていた。1903年、一高生、藤村操が華嚴の滝に身を投げたことは、『死生観』が刊行され、好評を博する一因となった。藤村が身を投げるに先立って書き記した「巖頭之感」はシェークスピアにもふれた名文だった。「死生観」の語からは西行から芭蕉、さらには夏目漱石、宮沢賢治と日本の詩人、文学者の名前が自ずと連想されてくる。現代の死生学も一面にはこうした関心を反映している。これは死生学が「スピリチュアリティ」と深く関連していることにも関わっている。宗教・実存・文学といった領域と切り結ぶわけである。だからこそ広い関心をよびますこともできるのだが、そこには死を身近だと感じさせることによる危うさが伴っているようにも感じられる。そのような畏があるとして、死生学はそれにどう向き合っていけばよいのだろうか。